

道恋慕編朗読一雨宮映月。七時散会。当日は八ヶ丘中央観光KKの樋口部長以下三氏来賓出席。(五月例会は都合により臨時休会した)

三位研修同志会六月例会

六月二十七日(日)昼三鷹市上連雀公会堂。門琴・伴流謡切連弾・錦幽・錦道・鼓城、琵琶行・中村晃憲、城山・富田秀明、教盛・杉山旗水、小曲教盛・山崎錦幽、木村重成・篠宮操水、菅公・八束一峰、薄陽江(上)・鈴木鶴、同(下)・田戸桜丸、瀧口恋慕篇・坂本錦道、博雅卿と婢丸・伊集院鼓城、武蔵野・西村嵩峻。以上研修後小宴を開き解散。尚七、八月は盛夏のため休会することとした。

京都琵琶協会七月定例茶話会

七月三日(日)昼会員矢吹旭美津女史宅。梅雨というのに涼しく晴れた爽やかな土曜日、例により数氏研修演奏のあと本月二十三日祇園八坂神社奉納会、八月琵琶湖畔の駒井氏別荘での一泊納涼懇親会その他を協議し附近の料亭で夕食を共にして散会。当日は病気で久しく欠席中の会員木村維水氏が元気を顔を見せて皆を喜ばせたが五月から入院治療が続いている古谷寛水氏の欠席は淋しく全快の早からんことを一同祈願した。尚筑前琵琶山岡旭清女史が矢吹女史の紹介で本月から入会された。出席者・伊吹正陽、田中鵬水、梅原旭濤、安住旭康、矢吹旭美津、山岡旭清、牧南水、荒木旭媛、馬場鴨水、木村維水、峰口高昇、平

井春嶺、山田女史、植村真水。

晴風会夏季公開例会

七月三日(日)夕六時・九時東京杉並区高円寺会館、主催浅野晴風氏。春の調べ・藤沢、秋海棠・諸遊清風、吟児島高德・菅野青仙、常陸丸・太田尾青桜、月下の陣・中山礼子、別れの盃・岩崎竜風、高松城・本橋錦鯉、旅・竹内寿風、俊寛(上)・野口隼水、同(下)・福島水、竜の口・大関英子、須磨の春・高田登水、城山・杉山雅俊、薄陽江・山下晴楓。尚次回は九月二十六日(日)夕同所にて開催予定。

祇園祭協賛八坂神社奉納演奏会

七月二十三日(金)夕五時京都四條八坂神社能楽殿、京都琵琶協会主催。(次号詳報)

ラヂオ琵琶放送(敬称略)

六月二十四日(日)夕五時NHK・FM「屋島の蒼」友吉鶴心、「敦盛」都錦穂。七月八日(日)同「白虎隊」平野鉦水、「名月逢坂山」鈴木流泉。七月二十三日(日)同「オーディション合格」修善寺物語」藤波桜華。

針谷錦古氏レコード吹込

テイナクレコード「琵琶吟曾我兄弟」吹込完了、八月初旬全国一斉発売される。

(予)告
○ 京都琵琶協会八月定例茶話会 八月八日(日)昼一時会員田中鵬水氏宅(京都市南区西大路八條西入上ル)市電西大路八條下車、電話(三三三)〇三五五一番。
○ 東西合同琵琶夏季一泊懇親会(薩摩四明会・正経会・鶴彦会共催)。八月二十一、二両日滋賀県大津市坂本町「西教寺」。

あきごと

暑中御伺い申し上げます。東日本では梅雨期の冷寒、地球の裏側では同じ季節に連日四十度の猛暑、関東東北地方での小地震の頻発、世界的とも云うべき天候異常で若しかしたら地球沈没の前兆ではあるまいか。心配しなさんな梅雨明けのキラキラ照りつける真夏の太陽を屋根に受けて扇風機やクーラーで涼を取りながら我々は琵琶を喰って心頭を滅却すればよい。夏来たりなば秋遠からじ、やがて又爽かな季節がやって来る。この酷暑は矢張り骨身にこたえる、暑さに負けまいと充分御自愛のほどを念願する。本号も紙数の関係で予定していた二、三の記事が次号廻しとなった、いつもの事で恐れ入るが御寄稿者から心からお詫申上げる。

昭和五十一年八月一日発行(非売品)
編集者 植村真水
発行所 京 経 社
〒569 高槻市津之江北町一ノ二二三
電話 〇七二六(八五六一)〇五一番

琵琶 機関紙

京

経

第二六六号 京 経 社

薩摩琵琶とその周辺 (六)

芸事の難かしさー昔の戦闘要員の養成ー足軽部隊とその武器 器 杖術ー杖術に辟易した武蔵ー鉄砲伝来と戦闘型式の変化

東京 坂本 錦道



芸ごとにも色々あるが、特に薩摩琵琶に限ってその習得は普通芸ごとの倍以上もかかる。妙寿以前のよう歌分離の時代であるなればまだしも、それ以後に於ては弾き語りや二重の苦勞を味わう難芸である。これを素人に教えて演奏の舞台にあげる迄には、どんなに速成教授をしても五、六年の歳月を要する。それでも師が手放して一人歩きが出来るのは十年もかけねば満足なものでない。さてそれからが大変で個性の進展、格調、枯淡の境に達するのは、ひっきり死ね迄の修業が前面に立ちだかることは諸師の既に御了承の通りである。

所て之を武技に就て見ると、昔大名の下に主力をなした上級戦闘要員の武士を仕上げるにしても、幼童の頃から学問はもとより武士の表看板である剣槍弓馬の術を教えて、一人前の武士になる迄は十数年の歳月を要する。昔の武將同志の戦に何千何万という戦闘要員

の内訳は武士ばかりでなく、この将校に比する武士の下にある身分の最下級の足軽隊や浪人等は無類の徒、百姓町人衆に及んでいる。この足軽部隊というものは一般民衆の中から採用し、之を常備して重要戦力となし、その強弱は直ちに戦果に物を云ったものである。百姓一揆というものが歴史の表面に現れて来たのは、平安時代前期貞観元年(八五九)の頃で、近江国依智荘(百姓と田情と云った)の検地に抵抗を始めた頃から史家は一揆の起点としているが、更にそれより下って室町時代幕府の年貢、貢租の苛徴請求に反発して起る百姓一揆や都市に於ける徳政一揆、打毀し等あなどり難い抵抗に対し、少数の武士団では反対に打ちのめされる、その威力を利用して応仁の乱以後領主は、一般民衆の中から足軽部隊を常備して重要戦力とした。その足軽も武技として剣槍の術も習っていたが、俗に云う「足軽番太の棒術」と称し専ら之を主

要武器として、各藩にはこの棒術の達人が沢山いたが、ただ身分が低いのでその名人の氏名が表面に出ないまでもある。その足軽衆の用いた棒は六尺、武士の間用いた杖術は四尺二寸、何れも赤檜を主材とし足軽は棒、武士は杖と区別があった。

この杖について面白い話がある、宮本武蔵は生涯六十二度の真剣勝負中、只一度勝敗を決し兼ねて引分けとなった一番がある。対手は四尺二寸の杖術の達人夢想権之助である。武蔵もこの権之助の変転自在に繰り出す杖の腕前に、如何に秘術を尽して攻め込めばとて退かばとて危険が身に迫って、その杖術の妙技に圧倒されてしまった。一時間半に及ぶ激闘に双方へとへととなって、どちらからともなく今日の勝負はこれ迄として、後日雌雄を決しようとの再会を約して別れたとある。

この杖というものは日頃の修練の香油によってツルツルに光り滑る木肌で、武蔵程の名人が真剣をもってしてもこの赤檜を真つ二つに切断することが出来なかつたという位で、実戦の場合は刀より杖や棒の方が遙かに有利であることは、筆者も青年時代私の父や中山先生の指導を受けた時の実感である。その伝承者は戦前武徳会に登録された中山博道、清水隆次、坂本泰助の各氏である。一方足軽衆に伝えられた六尺の棒術は、絶え絶えとなりつつ昭和中期迄静岡の剣客大長九郎氏が継承している。因みにこの棒術を用いた足軽は、明治維新に於て士族に列し消滅した。

さて昔の用兵作戦に足軽の登場と、更に鉄砲という飛道具が現れるに及んで、その用兵作戦に重大な変化が起きる。以下その由来に触れてみよう。

茲で話は一足飛びに天文十二年(一五四三)に遼り、ポルトガル人の乗込んでいた船が種子ヶ島に漂着して火縄銃(ムスケット)を領主時亮に伝えた。と同時にその製法として鉄板を巻き鍛冶して内筒を作る方法と、火薬の製法も伝えたことに始まる。この驚異的兵器は瞬く間に全国に普及し、時恰かも戦国動乱の最盛期で、その技術は和泉の堺の橋屋又三郎や紀州の雑賀、根来の僧等に伝わり、十年も経ぬ内に坊の津、平戸、豊後、近江国友村等で製作が始まった。諸藩の武將は競ってこの新兵器を求めんとしているに反し、この死の商人達は莫大を巨利を博していた。

新兵器鉄砲の利用は、従来の武將の戦闘形式に革命的变化をもたらされ、旧来の一騎打ちや騎馬歩兵の斬込みもこの鉄砲の前には何の役にも立たず手も足も出ない有様で、これ迄五年も十年も要した戦闘員の養成にしても、僅かに数ヶ月にして立派な狙撃兵が出来上がるという次第である。

この鉄砲伝来に関して薩摩の文之和尚の書き遣した「鉄砲記」というものが残っており、史家は之を引用されているが、この文之和尚は仲々に文才のあった人らしく、薩摩琵琶歌「似賊」も作者は文之和尚とあるから同一の人と思う。

その鉄砲利用の話一かの強情我慢の信長勢も、雑賀、根来の鉄砲衆の前には二度も兵を退かさねばならぬ浮き目を見ているが、然し大海戦術で多勢に無勢で雑賀、根来衆は最後は屈服の余儀なきに至ったが、信長はつくづくこの新兵器に対して考えを改め、その兵器採用に血眼となって鉄砲製作の本拠堺を手中に収め、代官を置くことに成功し鋭意その量産に努めた。そこで天正三年(一五七五)あの長篠の戦に於て、信長三千の足軽鉄砲隊のため、武勇を誇る武田の一万五千の歩兵、騎馬隊は忽ちに撃破され、生還した者僅かに三千と称されている。

さてその頃鉄砲の操作は名ある武士が行うにしても、その訓練を受ける者は足軽ときまっていた。これは奥村正治氏の「火縄銃」に述べられている。この鉄砲隊の分担をはっきりさせたのは、徳川の天下となって家康お気に入り入りの朱子学の儒者林羅山である。鉄砲という飛道具は幕府自体にとって、一つ間違えば幕府自身の命取りの危険なもので、羅山をして思想宣伝をやらせている。その言分とする所は「鉄砲という飛道具は伝来の武士道に相反し、鉄砲は身分いやしき足軽に持たすべきもので、決して武士の手にするものではない」と云うのである。(以下次号)



新中納言知盛卿

一平家物語の中から

辻 旭 城

当時僅かに十六才の少年知章が、兵馬混乱の中、よく身を挺して父知盛の危急を救った行動は、世界に誇る日本国の「孝道の極致」を示したもので、聞く者皆感涙に咽ばぬは無いという古今の美談である。従って此物語は文献平家物語の外、源平盛衰記巻三八や謡曲では「知章」、琵琶歌では「須磨の知盛」等に作られている。その琵琶歌萬生桂雨作詞、橋流五絃筑前琵琶「須磨の知盛」によると、一 生田の杜に咲き匂う香りも深き梅の花、散り散りとなる平家の一門、武運もここにつき弓の折れて無惨や一の谷、今は猛火に包まらる城を見返るひまもなく、主上を始め奉り人々船に飛び乗りて沖の方へと漕がせけり。茲に新中納言知盛は、子息武蔵守知章、待賢物太郎頼賢と、主従三騎御座船に後れて急ぐ後より、それに落ちさせ給うは平家の大将軍とこそ見奉れ、まさのうも敵に後ろを見せ給うも哉、返させ給え戻させ給えと呼びわたりつ、俄に近付く七、八騎、団扇の旗をさしたるは児玉党とぞ知られける、監物太郎頼賢は物々しやと振り向き様、真先かけし旗差し

を只一矢にぞ射落しける、敵兵それにもくれば知盛遣らじと打かゝるを知章あなやと駈け隔て獅子奮迅と戦いけり、やがて打物投げ捨てつ、前なる敵と引組んで、両馬が間にどろりと落ち見事に首を掻き切りけり、益々急に迫り来る敵を必死に防ぎつ、父上疾く疾く御座船を御慕いあれやと苛立ちて声急しくぞせき立つる、あとに心は残れども今は猶予もあらざれば、さらばとはばかり知盛は近づく敵を蹴散らして、さんぶと海に駒乗り入れ一町ばかり泳がせつ漕の方を見返れば、あな無惨やな知章は剛なる敵に組敷かれ遂に首を挙げられけり、知盛無念や方なく確とそなたを打睨み、我子の讐敵と一さんに馳せ戻らんとなしけるが、君の御先途見奉らて若し又我れも討死せば、君恩に背く恐れありと思ひ返しつひしひしと、心の胸に鞭打ちて又も沖へと泳がする。時しも元暦元年の二月上流の事なれば早立ちそむる春霞、淡路島根を左手にして遙か彼方を見渡せば、落ちなんとする夕陽を洗うに似たる波の上に、漂い浮かぶ御座船は十有余丁が程ならん、連れ泳がせ着きけるが船には人々乗り満ちて馬を載すべき空隙もなし、詮方なければ知盛はさながら人に物言り如く、馬に諭して別れを惜しみ漕の方へ放ちやれば、さすが稀代の逸物も主に別れてしおじおと、力なげに引返し波打際足掻きして、船の方をば振り向い二度三度悲しげに嘶きけるこそ哀れなれ、漸くにして知盛は宗盛卿の御前に出て、我に代って知章が討死しけ

るあらましを、事も落ちなく物語り情々思い巡らせば、焼野の雉子身を捨て、その雛を救う例あり、ましてや人界に生を受け子の討たるを他所に見つ通れ来たりし無慈悲さよ、然は云え君恩には代え難く如何なる海の果て迄も主上を守護し奉らん為ぞ、うたてや弓矢取る身ほど苦しきものは世にあらじと、ほろりと落す一零鎧の袖をぞ濡らしける。宗盛卿も涙を浮かべ後れ先だつ習わしは是非なき事とは云いながら、父に代りし知章こそ返す返すも殊勝なれ、当年僅か十六才我子と同じ齢なるかと、俄に嫡子清宗を顧み給えば人々も、擡の傘か袖袂濡らさぬ者こそなかりけれ。流転の海に沈む身も浮むも共に泡沫や、何時とは知らぬ運命を乗せて漂う船の上、八重の汐路に打ちむれて声も哀れに友千鳥、如何に愁を深むらん。

(註解)

- ① 生田の杜：神戸市国鉄三宮駅の北方、生田区生田神社の背後地にある。
- ② 主上：八皇八十二代安徳天皇。
- ③ 児玉党：武蔵七党、丹、猪殿、東、平山、清、横山、児玉。
- ④ 打物：太刀、雉刀等の武器。
- ⑤ 足掻：馬が前足で土を掻くこと。
- ⑥ 漕：波打際。
- ⑦ 後れ先だつ習わし：死生常無く親も子に後れて死し、子又親に先立って死す習わし。
- ⑧ 流転：因果応報。転々として休まない。
- ⑨ 泡沫：水泡の如く何時消えるかも知れぬ。

はかない運命。

平知盛は仁平元年(一一五一)清盛の第四子として生まれた。平治の乱後累進し、治承年間(一一七七一—一一八〇)後三位左中将、左兵衛督、院院別当となる。治承四年源頼政挙兵の際には之を山城国宇治に襲って勝利を収め、翌養和元年には源行家を尾張国板倉に連破し、功により参議の高位を賜り、ついで権中納言に進んだ。(平家方からは新中納言と呼ばれていた。)

寿永二年、木曾義仲京都に進攻、そのとき敗戦した知盛は我將兵をまとめて近江粟津に戦ったが、武運つたなく破れて、宗盛と共に住み慣れた京の都を捨て、九州太宰府に落ち、次いで讃岐の屋敷に移った。

その頃義仲は備中、播磨辺の戦に破れ、一方頼朝にも対抗の必要があったので、宗盛に和議を申し入れた。宗盛はこれに応じようとしたが、知盛は強く諫めてこれを許さなかつた。同三年一の谷の合戦の際には前述の通り生田森の大将軍を勤めていたが敗北、長子知章の孝心によって危急を免れて屋敷に還り、同四年壇の浦の合戦には勇戦の末、安徳幼帝を始め一門の女性に入水を勧め、これを見届けた後自らも投身して一生を終った。

京社電話番号の局番(八五)が八月末頃(日時未定)から(七三)に変更の旨電話局から予報を受けました。九月号で確報します。(六〇五一番は変更なし)

我が道を行く

六十五年(四〇)

西郷 天風



大体このビールは旅館からのサービスだったが、下戸の私には少々不向なれど折角の好意だ就寝前一杯もよかうと、文机脇の火鉢の片隅に立てれば、底の方からミゾレ色の固まりがビール色の液体と化して徐々に其量を増し、やがて瓶の口を塞いでいるミゾレの固まりがとけ初めるや、ビール本来の泡が吹上げだした、この思いがけぬ咄嗟の出来事に狼狽のあげくが灰神楽を天井に吹上げる結果となり、一人哄笑を禁じ得なかつた。之が雪国へ旅しての第一夜で、幸先のよさを占うようでもあった。

翌日はその年最終の日、つまり大晦日に当り、朝日館ではそれまでの面目を一新し、華々しくうぶ声をあげる記念すべき日とあって、館主をはじめ従業員達の顔もよろこびにあふれ、客足も亦開映時間既に満員締切となつた、しかも一夜明けて、大正十一年の元旦はもとより二日、三日と日毎に客足は倍増し、入場できぬ数十人が口々に歎息を洩らしながら暫くは立去りかねて雪の中に佇む有様に、迷ひ勝の館主もようやく内部改造を決意し、三日の夜より昼夜兼行徹夜の非常手段で、映

映画上映中といえども工事の手を休めず、トントンカンカンの槌音に和しての琵琶演奏では労多くして功少なく、汗みどろの苦行は私の生涯を通じて二度とない体験となった。

さてこの四日間の突貫工事によって百余の客席増設が完成し、漸く顧客の要望に応ずることになったが、之はひとえに松竹キネマのお蔭であり、すぐれた琵琶劇によって大入満員に終始することができた、顔をほころばせ乍ら私の為に宴席を設け、左の如き述懐談に眼を輝かすのであった。

この秋田では、朝日館と秋田座とが同じ日活映画で対抗していたが、規模の点でも財力の点でも両者は比較にならず、常にママ子扱いに堪え忍んで来たが、今度松竹キネマとの契約によって、そのうつ憤を晴らすこととなり之に越した喜びはありません。

かくて変りなき将来を約して三週間の琵琶劇を終え、私はなをも雪深き風物を求めて北海道を目指し、松竹キネマへは「ハコダテヘユク、ヨロシクナム」の打電と共に秋田市を発ったのが一月の二十一日だった。

乗車券の期間は五日間有効とあり、途中見物しながらゆっくり行けばよいと心にきめ、雪景色の美しさを満喫しながら一人悦に入っておると、途中から私の前に座を占めた女将風の婦人から声をかけられた。

「お客さん東京からですか。」
「ハア、秋田に三週間滞在し、今日秋田を発つて来ました。」

その頃気付いみれば汽車は停車し、数人の客が手ぶらで下車したと見れば、各々一握りの雪を手にして戻って来る、思わず窓の外を見れば、壁の様に積み上げた純白の雪に手を突込み、中の方の良い処を握り取る仕草も楽しそうに見られた。

スチームの温度で喉の渇きをおぼえたのか、前の女将は私に問いかけた。「まだ時間は、大丈夫でしょうか？」
私は車窓から汽関車の方を見れば、折柄二、三人の乗務員が車外に出て談笑の様子は、まだ発車に間があるらしい。女将は安心して、むすび大の雪を二個持込み、一個を私に呉れるのだった、やがて動き出した列車があと戻りを初めたのはちよつと驚いたが、これは私一人だけでどうやらそれは特別の個所しかなかった。

扱この一握りの雪で結ばれた女将との談話は意外な発展をみた、まず私の行先を尋ねられるまゝ函館行を話せば、青森に知合いでもあるのかと聞く、この列車は青森着が真夜中で、青森駅前には旅館が一軒もないと云う、折しも車掌が検札に来たので問うてみれば、青森の一駅先「浅虫」と云う温泉が安値なので、旅客は総て浅虫温泉に吸収され、青森では旅館が成り立たぬのだと云う。

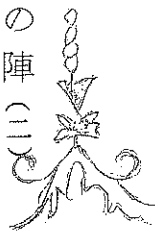
女将は、待っていたといわんばかりの面持で、お客様、浅虫は男一人で行く所ではありませんよと、まことに親切な眼差しで、どうぞ私の処へ泊って下さい、東京の人と知って

は何が何でもお世話しなければ私の気がすみません、とつぶさに其心境を語るのだった。

この女将は数日前東京から帰ったばかりで土産物を親戚へ届けての帰りみち私と同席した訳で、その語るところによれば、彼女の一人息子が前の年に早稲田大学に入学し、初めての正月を東京で迎えるに当り、親の立場からみて我儘一杯に育った仲が、馬の目をぬくといわれる東京のきびしい中で、見知らぬ家に下宿ではさぞかし不自由でつらい毎日だったろう、せめて正月だけでも我が家に帰って気まぐれに過ぎてやりたいたと再参帰郷をすすめたが、却って、東京見物をさせるからとしきりに上京を促がして来るその心境が不審に絶えず、多忙の家事を放棄して上京、下宿を訪ねて見れば家族ぐるみで至れり尽くせりの親切さは、田舎育ちの親達の到底及ぶところではない、帰りたくないのも当然だった。

大阪夏の陣(二)

山川 流水



徳川家康のために外壕や二の丸を無くした裸城に、元和元年春真田幸村始め浪人大將達や、豊臣方の大野治房らの主戦派は、徳川討つべしの執念を燃やし士気愈々上がり、町々には様々の噂が流れる。これら大阪城内外

の模様は徳川方の放った隠密によって、細大漏らさず家康のもとへ流された。

城内潜入のスパイは小幡景憲のみではなく所司代板倉勝重は家来を間者として入城させ冬の陣のときは七組の組頭の一人、伊東丹後守長実の部下となり、夏の陣では樋口淡路守雅兼に付いて城中の様子を勝重に毎日報告している。又京都に入り込んだ大阪方の忍者數十人を捕え、その幹部級三人に金品を与え、その妻子を人質にして逆スパイにした。この外家康が直接伊賀者を浪人募集に応じさせて城内の混乱を計ったなどの数々が、大日本史料に記されている。従って家康は、大阪城内の動勢は秀頼以上に知っていたと云えよう。

その家康のもとへ大阪城から使者が出た。三月十五日、秀頼の使者として七組の隊長の一人青木民部少輔一重と、淀君の使者常高院(淀君の妹)二位局、大蔵卿、正永尼らが駿府へ着いた。「前年は戦火と干害で住民逃散のため年貢米が収納出来ず、将兵を養うのに困っている。近くの土地を賜りたい」と云う交渉である。

家康は「近く名古屋へ行くからそこで返事を待て。青木民部少輔は江戸の秀忠に報告して後名古屋に来るよう。」と云った。

「大阪市史」は、家康が即答を避けた理由を、大阪の要求は拒絶すると決めていたが、交渉が早く決裂すると大阪方が直ぐ開戦準備をする。返事を延ばしている間に徳川は動員を完了しようとした。としている。

「日本戦史・大阪役」によると、同十五日京都所司代から来た急使が家康に「大阪方が京都に侵攻してくるといので、京都は騒乱状態にある」と報告。家康は即日第一次動員令を下して、伊勢と近江の兵力に、京都、尼ヶ崎と淀城に増員を命じ、四月早々にそれぞれ配備についた。

三月二十八日第二次動員令を出し、四月四日駿府出発。十日名古屋入りをする常高院らの大阪使者に「大阪方は京都を攻撃しようとしているので、近く京都に出掛けて実地調査する。」と常高院、二位局の二人を大阪に帰させたが、外の三人には京都行きを命じた。そして家康は十八日京都二條城に入り、秀忠も二十一日伏見城に着くと、二十三日から二十五日に亘り関東勢の動員部隊も続々京都周辺に到着した。

準備完了の後家康は二十四日、大蔵卿、正永尼に「和議成立すれば浪人に用事は無い筈にも拘らずそのまゝ召し抱えているから食糧不足となる。城中で戦備を整える為に人心動揺を来たす。此際摂津、河内の代りに大和を与えらるから郡山へ移るべし。」と秀頼母子への返事を持って帰城せしめた。

一方、大阪城では駿府へ遣わした使者が帰らずに、四月になると京都、伏見に関東兵力が集結し始めたを知って四日、秀頼は諸將を集め「事ここに至っては家康を迎えて決戦し、刀折れ矢尽きたらば諸氏と共に戦死せん。」と決意を述べ、将兵に金銀を分配して戦備を

暑 中 御 見 舞			
〒164 東京都中野区中野二ノ二五ノ六 電話(三八一)八九二二番	薩摩琵琶 浅野晴風	〒156 東京都世田谷区経堂三ノ三七ノ六 電話〇三(四二八)七四八三番	正派 西郷天風 邦楽名絃会
〒606 京都市左京区岡崎徳成町一四 電話〇七五(七七)四〇一六番	筑前琵琶橋会 法香久院 荒木旭媛	〒604 京都市中京区西ノ京西鹿垣町一 電話〇七五(八四)二九八九番	錦心流琵琶 牧南水
〒625 舞鶴市朝日通五條東入 電話〇七七三(六四)〇五一八番	日本旭会 舞鶴琵琶協会事務所 高橋旭洋	〒164 東京都中野区中央一ノ三二ノ六 電話(三六一)七七四〇番	薩摩琵琶 仲川秀邦
〒658 神戸市東灘区御影中町一ノ一四 電話〇七八(八五)二二六三番	錦心流一水会 琵琶を楽しむ会 田中欸水	〒198 東京都青梅市大門七八七ノ一 電話〇四二八(二二)四四五八番	薩摩琵琶錦水会 正絃会・四明会 岡部錦蝶
〒160 東京都新宿区西新宿六ノ三ノ一 電話三(三四二)一〇六〇番	日本芸術琵琶 柏会々員一同 柿沢篁峰	〒183 東京都府中市新町二丁目六八 電話〇四二三(六一)五六八四番	財団法人日本民謡協会参与 薩摩琵琶吉水錦翁門下錦道 段道七坂本直道 正絃会・四明会・鶴絃会 篁流詩吟・琵琶
〒176 東京都練馬区豊玉北五ノ一一 電話(九九一)〇三六三番	鈴木誉士	〒569 高槻市南総持寺町 電話〇七二六(九六)八五一六番	吉井良三

暑 中 御 見 舞			
〒369 -12 埼玉県大里郡寄居町玉淀 電話〇四八五(八一)一七四〇番	錦心流琵琶教授 平野鉦水 大井錦淀	〒520 大津市中央一丁目一番十号 電話夜〇七七五(二四)五〇六五番 電話昼〇七七五(二五)二二七番	筑前琵琶日本旭会 大阪中央部旭会 塩谷旭洲 〒535 大阪市旭区中宮四ノ二二ノ一四 電話〇六(九五)九二九四番
〒612 京都市伏見区深草瓦町六 電話〇七五(六四)四八二〇番	桜井旭会会長 秋元旭晨 井上兼子	〒011 秋田市土崎港中央四丁目九番 電話〇一八八(四六)三三三四番	錦心流一水会秋田支部 星野雄水 熊木鼓水 〒350 埼玉県川越市南通町一ノ二一 電話〇四九二(二二)四四六一番
〒604 京都市中京区高倉通丸太町下ル 電話〇七五(二二)二〇八九番	薩摩琵琶高昇流家元 泉勝院峰口高昇 吉井良三	〒181 東京都三鷹市上連雀二ノ九ノ一 電話〇四二二(四四)一四一六番	都派琵琶教授所 家元 錦穂 會員一同 日本琵琶同志会本部 三位研修同志会本部 同 志 一 同

暑 中 御 見 舞	
〒617 向日市西向日鶏冠井町山端 電話 (九三一) 一六九一 二番地	梅原旭濤
〒250-04 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 電話〇四六〇(二二)二一一二番 一三〇〇紅葉閣	筑前琵琶橋会 押川旭葉
〒790 閑居庵 松山市柳井町一丁目 電話(二二)二三一七番 松山市立花町三丁目五ノ六 電話(四一)三八八七番	日本琵琶楽協会会員 愛媛琵琶連盟顧問 薩摩琵琶 佐藤晃絃
〒184 東京都小金井市本町一ノ八ノ五 電話〇四二三(八一)三三四番	錦心流一水会多摩支部長 各流派琵琶武絃会事務所 伊藤磐水
〒570 守口市緑町土居団地十一号 電話〇六(九九二)五六二五番	大阪吟水会 青木邦雄 山田吟 桜田吟 北村玄 金寄靖 小西甫 小川吟 水
〒601 京都市南区吉祥院中島町 電話(六九二)〇二二八番 三〇ノ八九	琵琶三美会 會長 矢吹旭美津 田中鵬水 富山旭貴 西村旭富 一坊寺旭清 外門人一同

暑 中 御 見 舞	
〒171 東京都豊島区高松三ノ一二 電話〇三(九五五)三六四五番	筑前琵琶旭鴻会本部 大師範・法汪山 藤巻旭鴻
〒160 東京都新宿区三栄町一六 電話(三五二)四五九一番	日本旭会 大師範 押田旭窈
〒606 京都市左京区下鴨蓼倉町一六 馬場鴨水方 電話〇七五(七八一)三〇五〇番	錦心流琵琶 一水会京都支部 會員一同
〒570 守口市緑町土居団地十一号 小川吟水方 電話〇六(九九二)五六二五番	錦心流琵琶 一水会大阪支部 會員一同
〒431-31同 浜松市積志町一八三 電話〇五三四(三四)〇八七一番	薩摩琵琶鶴彦会 會長 小野鶴彦 幹事 三上鶴浄 同 染谷鶴泉 同 伊藤鶴麗
〒678 相生市相生二丁目一四ノ一七 電話〇七九一二(二二)五一七八番	師範 浜本旭好
〒653 神戸市長田区梅ヶ香町一ノ一五 電話〇七八(六七)〇〇一八番	筑前琵琶日本旭会 師範 田中旭昇

舞 見 御 中 暑

〒520
大津市逢坂一丁目二ノ三一
(蟬丸神社前)
電話〇七七五(二四)九三二八番

松岡旭岡
伊藤旭暢

〒343
越谷市大成町一ノ二三九二
電話〇四八九(八二)
一二四一番(代)

日本琵琶振興会
鈴木流泉

詩吟部一同
高田村山木堀吉川吉山田楊竹反三松
原中上下宮田田上山崎村内町浦野
文緋吟吟蓮蓮蓮琵琶瞳蘭魁嶽優紫
子子湧心尚弘葉水水水水水水水水雲

一水会神戸支部
三浦蓮水会
事務所 西宮市羽衣町七ノ三四
三浦蓮水方
電話〇七九八(三三)
五八八七番

舞 見 御 中 暑

〒173
東京都板橋区板橋一丁目二十一
番四号
電話 (九六一) 一一〇〇番

池上作三

〒060-91
札幌市中央区南六条西七丁目
電話〇一一(五一二)七二五二番

岳城流薩摩琵琶
広川岳楓

平峰水木木阪荒古牧山山安矢梅植田若戸戸馬伊
井口内下村本木谷 岡本住吹原村中宮田倉場吹
春高媿皇維一旭竟南旭嶺旭旭旭冥鵬旭旭旭鴨正
嶺昇水水水峰媛水水清舟康津濤水水登公嶺水陽

京都琵琶協会
〒603
京都市北区平野宮西町六四
平井方
電話 (四六二) 一四二三番

暑 中 御 見 舞

〒651
神戸市葺合区上筒井五ノ四ノ二
電話〇七八(三二二)一六一番

宝塚花組
上原まり
(旭艶)

筑前琵琶旭堂会
旭会大師範
柴田旭堂

〒544
大阪市生野区小路二丁目二六―二五
電話〇六(七五三)〇六六七番

高千穂旭楓

〒537
大阪市東成区神路三ノ八ノ十八
電話〇六(九八二)二九一―四
夜間〇六(九七二)二七七八番

榎本旭風

筑前琵琶日本旭会理事
東大阪旭会会長

正派 薩摩琵琶四明会

事務所 京都市北区平野宮西町六四
〒603 平井春嶺方
電話〇七五(四六二)一四二三番

会 員

京 都 栗 本 天 芳
 " " 伊 吹 正 陽
 " " 平 井 春 嶺
 四 日 市 山 本 錦 舟
 大 阪 有 馬 南 城
 神 戸 藤 崎 天 光
 枚 方 山 之 内 兼 光
 川 西 山 田 良 盛
 名 古 屋 小 山 田 叢 三
 浜 松 津 野 鶴 彦
 久 留 米 島 津 篁 峰
 京 都 早 石 天 正
 大 阪 伊 勢 谷 秀 夫

暑 中 御 見 舞

〒154
東京都世田谷区太子堂二丁目二番八号
電話 (四一四) 六五七八番

宮崎直二

〒569
高槻市津之江町二丁目十二ノ三
電話〇七二六(七)六五八〇番

山崎光掾

大和流琵琶吟家元

山崎旭萃

筑前琵琶橋会宗範

西川旭操

門人一同
清真流会員一同

〒670

筑前琵琶日本旭会
清真流吟詠会本部

本 部 姫路市北平野南町六九二ノ三
電話 (八二) 一八三二番

支 部 長崎市上西山町九八
(副島旭仙方)
電話 (二六) 〇六五六番

支 部 福岡市南区横手町三ノ一一ノ二
(久保田旭園方)
電話 (五九) 一五七一番

出張所 姫路市飾磨区構五五九ノ二
(水・土) 電話 (二五) 五六四六番

出張所 兵庫県宍粟郡安富名坂
(日・木) (円山旭芳方)
電話〇七九〇(六六) 二二四〇番

暑中御見舞

全朝協関東副部長
テイチクレコード専属
日本錦古流総本部会長

宗家 針谷 錦古

〒370-12
群馬県高崎市岩鼻町二四七
電話〇二七三(四六)二〇〇六番

日本民主同志会中央執行委員長
宗教人世界救世教外事対策委員長
京都救世会館名誉館長
社団法人日本郷友連盟本部理事
日本伝統芸術連盟理事長

松本 明重

日民同・世教外対
委・日芸連事務局
京都市下京区四條通高倉西南角
(大丸前)
電話〇七五(二三)一〇〇三番
(大和銀行京都ビル8F)
電話〇七五(二三)一〇〇三番
世界救世教本部
熱海市桃山町 瑞雲郷
電話(代)〇五五七
(八二二)一二五七
雲 澤居
京都市東山区山科日ノ岡堤谷町
電話〇七五(五九二)〇四〇四番

吟詠 赤心流
琵琶 赤心流
家元

赤心流 鶴翁

〒420
静岡市西草深町二十番二十号
電話〇五四二(五三)一四七一番

暑中御見舞

筑前琵琶教授
法紅山師範

中島 旭穂

〒602
京都市上京区堀川通さわら木町
電話〇七五(二二)四〇三三番

暑中御見舞

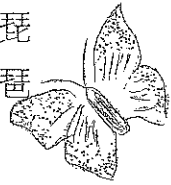
日本琵琶楽協会企画部
錦心流琵琶大館派教授

平井 洲誠

〒359
所沢市日吉町十七ノ十三
電話〇四二九(二二)三一七五番

若者と琵琶

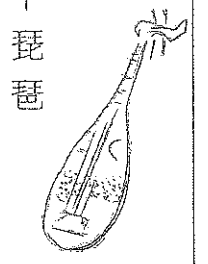
大阪 小川 吟水



京紙紙七月号に「若者の心とらえた楽器」云々の朝日新聞記事が転載されましたが、それは去る五月、池田市の青木邦雄氏(作曲家

固めさせ、翌五日後藤又兵衛、木村重成を先頭に、軍列を整え城外を巡視した。斯くして士気大いに高まった所へ、「大和郡山移封」との家康の最終回答が来た。秀頼は伊東丹後守長美を派遣して大和移封を拒絶し、開戦やむなしと宣戦布告をした。しかも曩に使者に出した青木民部少輔も、今回の使者伊東丹後守も再び大坂城には帰って来なかった。城内では二人の勇将を惜しんだ。然し、「日本歴史大辞典」大日本地名辞書によると、大坂落城後、伊東丹後守は一万三百石備中岡田(岡山県吉備郡真備町)の藩主となる。これはかつて関ヶ原役の際、三成の陰謀を家康に内報した功によるといふが、青木民部少輔も摂津麻田(現在の豊中市蛍池)で一万石の藩主となった、と記されているが、一説によれば大坂落城の時、青木民部は家康の孫娘で秀頼の妻千姫を火中から助け出して、家康に引渡した功に依るとも云う。琵琶歌の「坂崎出羽守」が実は青木民部であるとも云われる。

ギターリスト)主催による「琵琶コンサート」へ私と一門四名が出席し、演奏三曲に座談会をまじえた会のことでした。ほとんどが二十才代と思われる人びとの中にも日本伝統音楽に惹かれる層のあることを知りました。これら若人から多くの質問を受けた内容を要約して考えますと、大部分は琵琶という楽器への興味と音色の魅力に発しているようで、すべて音楽的な観点からの質問が多かったです。ですから歌と絃の音程の狂いなどはすぐ観破されます。中には「琵琶に精神的なものを感ずる」と述べた青年もありました。いづれにしても、このような現代青年の社会へ「語りもの芸能」としての琵琶を浸透していくことはむづかしいが、私も自身が更に芸をみがき、加えて文学的に音楽的に、また芸能的にもある程度説明し得る素養を持つて接してゆきたいと思えます(勿論芸ことは理論や言葉で済むものではありませんが)。こえて七月一日。今度は大阪梅田の「ギヤラリーベテ」という場所と同じく「琵琶コンサート」が、前記の青木氏(音楽)、山内十三男氏(古書)、武田好文氏(彫刻)と、それぞれ芸術専門家の共催で行われました。今回は私の独奏二曲と座談会でしたが、集まった人は二十数名でした。そして今回は音楽的な面に加えて文字としての歌詞説明を求められ、また「琵琶を弾く姿をデッサンしたい」という青年画家もありました。これは私ども今まで経験しないムードの琵琶会であり、現代の若者社会の一端に接した気がします。折角このような気運の芽生えを大切に育てたいと思えます。(七月五日記)



楽器 - 琵琶

柴田南雄

洋楽器がふつう一名称一種類なのに反して、和楽器はほとんど一名称多種類、琵琶も例外ではない。弦を水平に、腹板を正面に向けて構えるのが雅楽の樂琵琶（奈良朝に唐から、大型）と平家琵琶（鎌倉時代、小型）、ななめに持つのが盲僧琵琶（奈良朝に九州へ伝来、細身なので笹琵琶、また経文から荒神琵琶とも）、そこから発達した薩摩琵琶（戦国時代）と筑前琵琶（明治中期）では、やや大型の前者の方が垂直に近く構え、やや小型の後者はななめ気味に持つ。明清楽（幕末から明治）に用いられた中国琵琶は、ばちを用いず義甲でひき、たてに近く構える。

大昔にベルシヤ（イラン）のバルバットと称する楽器が東進して中国では琵琶、琵琶、日本ではビワに、西進してアラビアのウード、西欧のリユート、さらにギター等々に、この一族は長期にわたり、各地に子孫をふやした。日本の多種多様さもそのことと関係があるだろう。

樂琵琶はバラランと無愛想にアルペジオを引く掻き、平家では曲節の間奏を受け持ち、荒神では経文のリズム・パターンを

ひきつづける。薩摩、筑前では手も豊富で前者の男性的悲壯感、後者の女性的優美さが対照的。柱（じ）の中間をおさえるため、弦が微妙に振動する効果、ばち音の打楽器的效果、くずれと称する急速なトレモロなどに加え、現代曲では指、てのひら、ばちの手元の方などさまざまな響きをつくる。



わが師友を語る

田中勲 水

故馬瀬瀧水師について語る事は、小生にとり八年有余にわたり、公私共いろいろと御指導を賜ったことにある。直情径行の師は折りにふれ、君のうたは絃とバラバラである、二の絃の調律が悪い、どうも間延びするようだよ。このことはかつて富山市での演奏会に野尻撰水老と共に出演の時、楽屋で親しく石坂南水先生からアドバイスされたことを想起する。亦蔵本司水師宅へ河瀬碩水兄と共に伺ったとき、小生の「竜の口」に対し、あまり丁寧にうたい過ぎるんだろ、とニコニコしながら御指導下さった事が昨日のように思い出され、流石に感銘した事である。さて馬瀬瀧水師は夙に綜合琵琶に精進され、琵琶の近代化を志向された事は賢明とも云うべく、長生きされていたら新生琵琶が出現し

ただろうと、残念に思う次第である。晩年に於ける円満な人格と相俟って、その人間性に心ひかれるものがあった。亦会員の育成、芸道精進のため総伝を一水会本部に申請される等、斯道発展に努められた事は数々である。「勸進帳」一歌舞伎調の独白は圧巻であったことを特に付記する。（末稿）

田中鵬水琵琶コレクション 展示につきお知らせ

私の琵琶コレクションも百二十五面を数えるほどになりました。その中には樂琵琶・盲僧琵琶・支那琵琶等々、珍しい琵琶十一種類を何時でもお目にかけよう展示致しました。また琵琶に関する各種資料をも集め「琵琶資料室」も開設したいと思っております。尚新規琵琶習得者の方々のため筑前四絃、五絃、薩摩の各琵琶をお譲りする予定でございますので、御希望の方は左記へ御連絡下さい。

京都琵琶三美会琵琶教室

田中鵬水
京都市南区吉祥院中島町三〇の八九
電話〇七五（六九一）〇一二八
三美会では琵琶の修理も奉仕して居ります。御利用下さい。



漢詩一題

西宮春怨 王昌齡

西宮夜静百花香 欲捲珠簾春恨長
斜抱雲和深見月 澹籠樹色隱昭陽
西宮は長信宮、漢の太后の御所である。初め成帝から寵愛された班婕妤はその後趙飛燕が入内するに及んで寵を奪われ、長信宮の侍女となり、太后にかしづくことになった。

この詩はその班婕妤の悲しみを詠じたものである。

（雲和は琵琶の一種。箏に似、十三絃）美人の姿態と心情とがさながら目に見るように描かれて一幅の絵画に対するように思いがする。（鴨水記）



難しい琵琶曲

現代語で再生

難しで親しみにくい琵琶曲を、わかりやすい現代語に改めて再生しよう！こんな試みがいま、大阪の演奏家を中心に進められている。

民音特別公演で山崎旭萃

難解で親しみにくい琵琶曲を、わかりやすい現代語に改めて再生しよう！こんな試みがいま、大阪の演奏家を中心に進められている。

作品は、谷村陽介が書きおろした「白鷺と若者」で、琵琶の山崎旭萃と笛の藤舎推峰が作曲し、十三日、大阪更生年金会館の民音特別公演で披露する。出演は山崎、藤舎の二人。現代琵琶曲としては本邦初演になる。

こんどの公演は「山崎旭萃の琵琶」と題し、本年度の芸術選奨文部大臣賞を得た山崎に、藤舎推峰、藤舎呂弘という笛と鼓の俊鋭を加え、伝統芸能の真髄を伝えるのがねらい。曲目も「大楠公」「重衡」「安宅」などの古典曲を組んでいるが、ことばが古いため、若い人たちにわかりにくい。そこで制作に当たる谷村が一つの実験として、愛をテーマとする現代叙事詩を書き上げた。口語体だけに「あなたを愛します」などのせりふも飛び出し、この道六十年の山崎もけいこに汗だく。

「大きな声を出すと、ええとして、どうなってるの？」と近所の方に冷やかされるし、もう、おかしいやら恥ずかしいやら。専門の方からも、なにやってみねん、といわれそうですが、これで若い人たちが琵琶に興味を持って下されば、やりがいがあります」と、けっこう楽しそうだった。

開演は午後六時半。千八百円。（七月六日朝日新聞「原文のまま」）

（参考）従来の琵琶歌詞の現代語化については青森市中央二ノ一四ノ一六津軽琵琶宗家柴田富山氏が研究を続け既に数曲完成作曲して発表されています。（係）

一水会多摩支部・武絃会合同研修会
六月十三日(日)昼小金井市福祉会館。常陸丸
小山羽水、木村重成、篠宮優水、潮水乗切
一工藤慈水、薄陽江、高杉洲靖、舟弁慶、加藤錦陽、城山一石井敦水、桔梗の旗竿、伊藤馨水、異国の丘、杉山旗水、石童丸、坂井眺水。以上研修を終り六時閉会。

大鳥神社奉納演奏会

鬱陶しい梅雨空をふっ飛ばす六月十三日(日)昼十一時から堺市大鳥神社花菖蒲祭が神社本殿で古色豊かに取行われ、終戦後から慣例の大阪琵琶同好会主催の諸芸大会が午後から参集殿で開催された。西郷隆盛、宮の原聖水、五條橋、作花旭秋、天の羽衣、辻旭城、坂本竜馬、石橋旭嶺、大楠公、八千代社中、二〇三高地、寺尾旭吉栄、湖水渡、中山鳳水、若き敦盛、天津八千代、以上の外扇舞、剣舞、日舞、詩吟などが奉納され赤もろせを敷いた聴衆席では遠方からの花菖蒲観賞者や氏子たち約二千人が梅雨の晴れ間の長閑なひとときを楽しんだ。

日本芸術琵琶会六月例会

六月二十一日(月)昼東京新宿柏ビル六階。お江戸日本橋・門琵琶、錦幽、潮水乗切、石田脩水、景清、若林鶴山、小栗栖、神戸洲岳、乃木将軍、坂入俊風、異国の丘、山崎錦幽、西郷隆盛、長谷川錦舟、本能寺、青木甲水、千手の前、高田瑩水、敦盛、杉山旗水、滝口入